令和５年度　第５回札幌市文化芸術基本計画検討委員会
議事録

【場所】　札幌市民交流プラザ２階　SCARTS スタジオ

【出席者】　（以下、敬称略）

委員

合同会社ペン具（ペングアート）　代表	卜部　奈穂子
北海道大学　名誉教授	北村　清彦
札幌芸術の森美術館　館長	佐藤　幸宏
札幌芸術・文化フォーラム　副代表	白鳥　健志
北海道大学大学院　文学研究院　教授	谷本　晃久
北海道国際音楽交流会　理事長	長沼　修
市民公募委員	成田　真由美
市民公募委員	丸山　悠輝

事務局

札幌市市民文化局文化部長	柏原　理
札幌市市民文化局文化部文化振興課長	高橋　亮
札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係長	柴垣　孝治
札幌市市民文化局文化部文化振興課	工藤　智弘

北村：それでは、早速議事「第４期札幌市文化芸術基本計画の素案について」に入りたい。事務局から説明願う。

柴垣：（資料２・３について説明。）

北村：最後の会議になるので、これまでお寄せいただいたご意見、特に前回のものを中心にご説明頂いた。反映されたもの、されていないものがあり、議論の進め方も難しいが、ご自身の発言されたことを中心に、お気づきの点があればお聞かせいただきたい。では、順番に参りたい。

　まず、白鳥さんと成田さんの、計画素案５ページの図に関するご意見。図で表すというのは、わかりやすくはなるが、必ずしもそうではない場合もある。本質的価値はもとより経済的・社会的価値を膨らませるポンプの役割として４つの手法を抜き出しており、それが前回検討したステージ１～４に当てはまったとのこと。白鳥委員はいかがか。

白鳥：計画本書のページ下部には細かく注釈が入るということ。加えて円に描かれているのがまちづくり戦略ビジョンの項目だという説明があった。よって、極めてわかりやすくなっていると思う。先ほどのご説明とともに了解したい。

成田：本質的価値と、経済的・社会的価値の両方に分かれているが、図では経済的価値と社会的価値の 2 つにわかれているので、文章と整合性が取れていない。そもそもの考え方が違ったのではないかと思う。

　それから、文化芸術の価値を高める 4 つの手法とステージが合うというのは、私たちは何度も見ているのでピンとくるが、初めて見る人はタイトルも違うのでわからないと思う。そこは説明を入れてほしい。そうすると、「だからステージが 4 つ必要」というようにすっと入って説得力が出ると思う。

北村：社会的・経済的価値を 2 つに分けない方が良いということか。それはなぜか。

成田：文化庁の概念では「社会的・経済的価値」と 1 つのものになっているのを、わざわざ 2 つにするなら、社会的価値はこういうもの、経済的価値はこういうものというように説明が必要なのではないか。文化庁の表現に従うのであれば、整合させなければいけないのではないかと。

北村：従わなければいけないのか。

成田：分けるのであれば札幌市として独自に分けると説明があればよいと思うが、従うということなので図の方がずれているのではないかと。

北村：中黒をどう捉えるかということだと思う。国の文言として、「社会的・経済的価値」を 1 語としてとらえるか、2 つのものを省略してつなげていると捉えるか。札幌市としては後者と受け止めているわけだが、いずれにせよそれ程重要な問題とは思えないのだが。

成田：個人的には気になるという意見。

北村：4 つのステージと 4 つの手法が対応しているということを表現していて、「社会的・経済的価値」をわけるかどうかということがそれほど重要な意味があるとは個人的には思えない。

成田：札幌市独自のものを打ち出す方が良いと思っている。

北村：では、この図に合わせた文章にして（「社会的価値」と「経済的価値」に分けて）、そこに何が社会的で何が経済的なのかという説明をわざわざ行うということが必要なのか。

成田：私は必要だと思う。

北村：深掘りするなら、経済と社会は概念レベルが異なっていて、社会の方が概念的には広い。社会的活動の中に経済的活動もあれば政治的、宗教的など様々な活動がある。その中で、経済的活動というものを大きく取り上げたというのが 18 世紀以降の西洋の考え方で、経済が社会を動かす血液のようにとらえる考え方が出てきた。それゆえ社会と経済が同じレベルで語られるが、そうでなければむしろ社会的価値の中に経済的価値が含まれている。なので、（2 つを）並べても、つなげても、それほど大きな問題ではないと感じる。

成田：大きい小さいではなく気になったということで、それほど大きな問題ではないということならそれでもよい。

北村：この点、皆さんはいかがか。

佐藤：芸術や文化というものは、今まではあまり社会の役には立たないもののように見られてきたが、そうではなくて経済を回すために貢献できるのだということで文化観光などの概念

も出てきているので、そういったことを踏まえて本質的価値のほかに経済的・社会的価値と言っているのだろう。芸術団体なら経済的・社会的価値以外にもたくさんあると思うが、単純にそう分けているだけだと思う。

ただ、そう分けると、本質的価値がまず１つあって、他に社会的・経済的価値があってというようになって、（ほかの様々な価値が）見逃されるのはどうなのかなというのはあるが。本質的価値の中に経済的・社会的価値が含まれていて、そのほかにも色々あるのだと思うが、便宜的なものだと思う。このように分けてあっても、それほど国の文言と齟齬はないと思う。かえって一緒くたにするとわかりにくくなる。

北村：図示をすると、どうしてもわかりやすくなる部分と、そうではない部分が出てくるので、国が「社会的・経済的価値」と言っていても、学術的価値も政治的価値も当然あるだろうし、じゃあ政治と社会はどのような関係にあるのかという話になる。

たまたま国が経済的・社会的という言葉を使って、それをまちづくり戦略ビジョンの中で見ると、何が経済で社会なのかということを札幌市なりに整理して分けてみたということなのだと思う。それではいけないか。

成田：気になるということだけなので。そういうことであれば。

卜部：気になるというキーワードで、蛇口がどうしても気になる。「蛇口か」という感じ。視覚的な効果は強いので、ポンプならよいのだが、蛇口だとたわわに流れていくイメージ。皆さんはどう思われるか。

北村：前に成田さんがおっしゃった、「蛇口の開け閉めをするのはだれなのか」という話にもなる。なかなか難しい。

卜部：昔ながらの人力ポンプのようなイメージ。

北村：（価値を）膨らませるためのポンプ、あるいは下から湧き出す泉のようなイメージか。たしかに蛇口というのは気になるといえばそうかもしれない。ここでこうしたらよいというのはないので、完成までに事務局で考えていただいて、開け閉めの主体をあまり感じさせないような形のものが良いとおもう。よろしくお願いしたい。

それから資料３の２ページ目。私が提案した４つのステージについて、前回、白鳥さんと長沼さんからタイトルを考え直してはどうかというご意見であったが、事務局案ではステージのタイトルはそのままにして、中身に文言を入れるということ。白鳥委員はいかがか。

白鳥：私が一番最初から主張してきたのは、文化と他分野の連携を明確に示すべきだということ。

その件に関しては、「文化芸術の領域の拡大」の中に示され、さらに、私から「市民が読んでわかりやすいような例示を付けてほしい」と申し上げたことに関しては、ステージ４の領域拡大の施策１のところに記載されているので、ここまで書いていただければ、了承したい。

長沼：具体的に、「領域の拡大」という方向性をどこかで具体的に模索しているのか。メディアアーツの部分か。

柴垣：元々の考え方としては、異分野連携というものを進めていこうというのが根底にある。それをどっちから見るかだと思うが、文化側から見れば文化が広がっていくことで異分野つながっていくということを表現するフレーズとして「領域の拡大」ということを捉えている。

長沼：領域の拡大よりも、ステージ４はいかに文化活動・芸術活動を充実させていくかということが全ての結論ではないかと思う。それを「拡大」だけに絞り込むことはいかがかと思う。

北村：というよりも、基本計画全体が文化芸術をどう活性化させていくかという計画なので、活性化のために、まちづくり・教育・観光・福祉など様々な領域と連携して、領域を拡張させようというのがステージ４の考え方。ステージ４だけで文化芸術活動の活性化が実現するということではない。

長沼：そういうことであれば承知した。

北村：次に資料３の５ページのモエレ沼や図書館を入れるべきというご意見。これについては、モエレ沼は記載を加えた。図書館については、図書・情報館が hitaru や SCARTS と共に市民交流プラザの一部ということで加えたということだがいかがか。

成田：図書館という施設は、文化芸術施設ではなくて生涯学習施設なので入らないという説明があった。しかし、図書館の中に入っている文学は文化芸術の範囲なので、市民交流プラザの中の取組みとして図書・情報館と連携するという理解でよいか。

柴垣：文学という概念はここには入れていない。例えば図書館も美術の本ばかりおいているのなら、それは芸術関係の施設なのだと思う。あるいは文学ばかりならそうかもしれない。しかし、通常の図書館は必ずしもそうではなく、例えばノウハウ本などといったものも多様にあるので、生涯学習施設と認識している。文化施設に定義があるわけではないので、位置付けること自体は可能だが、これまでの概念ではそう考えていない。

　ではなぜ図書・情報館が入っているかというと、例えばイベントなどをするときに、それに関連する書籍でコーナーを作るなど、市民交流プラザ全体として連動する取組みを行っているため。モエレ沼公園も公園だから入っているのではなく「モエレ沼公園」だから入っているのと同じ。図書・情報館が市民交流プラザ全体と連携するので加えている。

成田：承知した。そのうえで、ステージ４の中で様々なところとの連携があるので、連携したらよいと思うが、ステージ４の話ではないと思うのでよい。

北村：連携するところについて制限はないので、できるところとはどんどんしたらよい。SCARTS も各区民センターが連携してなどといったことがあってもよい。例えば文学館が入ってもよいし、書けばきりがない。ここでは、札幌市文化部が主に所管している施設が中心になっているということで、ここしか連携しないということではないと思う。

　次に卜部さんの学校との連携に関するご意見。反映されているようだがいかがか。

卜部：問題ない。

北村：次に資料３の６ページ。前回、最後に時間があまりとれなかったが、アーツカウンシルについては白鳥委員と長沼委員からご意見があった。白鳥委員からは社会実験のような形で

行ってはどうかということ。長沼委員とはHIMES（北海道国際音楽交流協会）もアーツカウンシルのような機能を持った組織の１つだろうという話もあった。それほどすれ違った議論ではなかったと思うが、民間の力を借りながら、理想的には財政的にも独立して、権限などもスポンサーに影響されずに独立した組織であればよいと思う。それほどお２人の意見が違っているとは思わない。

白鳥：根本的に議論が整理されない原因をその後考えてみたのだが、アーツカウンシルという組織の定義が整理されていないことから来るものと思う。

　例えば、アーツカウンシルの中の１つの手法として「アーティスト支援に関わるもの」が想定されるが、私が思うアーツカウンシルは、事業チェックもその中できちんとできる組織図・系統図のようなものを作らなければいけないと考えている。それができてはじめてアーツカウンシルだと思う。

　しかし、現実を鑑みれば、本市においてはまだきちんと整理されていない段階と考えるので、今後整理しようということ。その中にアーティスト支援もあり、事業評価もあり、そういったものが総括されていると一番よい。そこを目指そうということ。

　この点、（素案の記載上は）「必要性の検討」のようなものだけだったため、もう少し内容も検討した方が良いと思っていたが、今回の案では記載されており、アーツカウンシルに関する記述も２か所に載っているので異論はない。

北村：佐藤委員はいかがか。調査研究というご意見があったが。

佐藤：白鳥委員がおっしゃったように、アーツカウンシルと一言で言っているが、色々なレベルの組織がある。札幌市がどういう形でやっていくのかということは、そういうことを含めて議論をしていくということで、対応していただけたと思っている。

北村：では次に資料３の７ページ。基金について。

白鳥：文化芸術の資金・予算が一方的に行政から出るものではないということは社会として認識されていると思う。そうなると、民間の資金をどう集めるかという点が着目されることになり、これまで行ってきた基金活用に併せて考えると良いと思っている。

　様々民間資金の集め方があるが、それを含めて基金というものを今一度深堀りすべきと思い、基金の関係に言及した。

北村：長沼委員から、企業からのお金集めに苦労しているというお言葉があったが、そういう苦労を市がこれから負わなければいけない時期が来るということだと思う。

長沼：少々わからないのだが、基金のイメージはどういったものか。一定のベースとなるお金を用意して、その運用益で何かを行うということか。

白鳥：昔は、基金について運用益という言葉が表面に出てきたが、今は運用益がなかなか生まれず、基金の切り崩しという場合がある。そこも含めてどうしていかなければいけないかということ。

長沼：なかなか基金というものが成り立たない時代なので、そういう言葉をあえて入れるのはどうなのか。

白鳥：概念的にはありうる言葉だと思う。なので、そういう言葉を含めてもう一度考えていく時期なのではないかと。

長沼：オフィシャルな文書に基金と盛り込むと批判もあるのではないかと。

柴垣：札幌市でも基金の運営を行っている。ふるさと納税を基金に受け入れたり、運用益による事業もあるし、取り崩して行う事業もある。

長沼：承知した。

北村：では資料3の10ページ。文化財に関しては、谷本委員から保全・保護についてのご意見があったが、今回の案では（文化芸術関係者のご意見を踏まえて）特に観光ベースで文化財を積極的に活用しようという文言が加わっている。この点についていかがか。

谷本：「観光を含めた」ということなので、当然、文化財の保存と利活用は両立しない場合もあるが、ぜひ保存をメインにして、保存がなければ活用もできないという配慮をお願いしたい。

3－1のところで網掛けがないが、確認させていただきたい。前回、自然史博物館の現行の取組事業例や第4期重点取組事項の部分で発言した。今回は第4期計画の検討ということだが、第3期計画を拝見すると「札幌博物館」と書いてある。平成27年に策定された「（仮称）札幌博物館展示・事業基本計画」が多分、今生きている最新の計画だと思う。第4期であえて「自然史」とつけるのは、自然史がメインで問題はないのだが、前回まで「札幌博物館」と言っていたものが「札幌自然史博物館」になるという大きな変更なので、ここは説明がいるのではないかと思った。

展示・事業基本計画をあらためて拝見したが、自然史だけではなく、150年の街づくりの歴史というのが含まれていた。ただ、自然史からポンと飛んで、「無人の原野にできたさっぽろ」という記述になっており、平成時代の考え方としてはよかったのかもしれないが、個人的に違和感ある。会議の最初に申し上げたが、アイヌ施策推進法が施行され、アイヌ民族は日本列島周辺、特に北海道周辺の先住民族として位置付けられている。である以上、自然史から飛んで150年のまちづくりに至るというのは、現状にそぐわないのではないかと感じた。

そこでご提案したい。計画素案の施策3－1の重点取組事項で、自然史博物館に変えるのは様々検討された結果なのだと思うが、展示・事業基本計画との整合性も考えて整理されたらよいと思う。前回、柏原部長からお話があったように、自然史の方向で計画しているが、歴史に触れないと決めているわけではないということだった。

ただ、展示・事業基本計画を拝見すると、「150年の歴史」が入っている。しっかりとその間を埋める形で計画されてはいかがかと思う。重点取組事項で「札幌市博物館活動センターで行う整備に向けた各種研究調査や自然史の魅力」のところで、「自然史・文化史等の魅力」というように付け加えると、計画に幅ができると思う。そうすると、文章の最後の「ふるさとへの愛着と誇りを育み、札幌が積み重ねてきた文化と魅力を国内外に発信する」という部分につながる。カイギュウなどだけではなくて、間をつなぐことを担保で

きる文言を足しては如何かと感じている。最後に個別の話で申し訳ないが、ご提案を申し上げたい。

北村：第3期と記載がずれている。当時は（仮称）札幌博物館とあった。ただ、札幌市としてはずっと自然史のことを念頭に置いていたというご説明。

谷本：ただ、今生きている計画では（仮称）札幌博物館になっているという状況もある。

北村：事務局としては今のご提案に対していかがか。

柏原：まず、展示・事業基本計画の前に博物館としての基本計画があり、おっしゃるとおりその当時は自然史と全面に押し出してはいないが、学芸員は古生物と植物という2本柱を念頭に、以前から自然史に特化してやっていたことは事実。ただ、対外的に表に出てきたのはここ数年でというのが実際の運用。

　展示・事業基本計画の中では、谷本委員のおっしゃるとおり、昭和などにも焦点を当てた展示を一部考えているところではあるので、そこが自然史だけではないというとそのとおり。昭和などを扱っていくと、一気に100万人を集めた土地が日本ではなかなかないということで、急発展を遂げた過程を示すという展示を想定している。先ほどおっしゃった「自然史・文化史等」というのは、現在の展示・事業基本計画などと不都合が生じないか考慮しつつ、文案について検討したい。

長沼：ぜひ自然史だけでなく、人間の歴史、特に明治になってからの歴史だけでなく、例えば発寒に和人が入ったのは江戸時代の半ばといったこと。それから米が最初に採れたのは恵庭ということになっているが、実は琴似の山の手でも取れている。そういったことを博物館で言っていかないと、大事なことは伝わらない。自然史に限らず広い意味での博物館になればよいと思う。

谷本：和人もアイヌも含めて、人の歴史の余地を残すような表現があれば、展示の計画がしやすい。

北村：事務局で検討いただきたい。

　続いて、根子委員の環境・SDGｓに関するご意見について。

根子：提案内容が盛り込まれて喜ばしい。前にもお話したように、文化芸術が内向きだけでなく、外から人を呼び込むという視点で考えたときに、これからのキーワードになると思うので、ぜひ進めていただきたい。

北村：続いて資料3の12ページ。白鳥委員のステージ4に「まちづくりの活用」を追記してほしいというご意見。反映されているようだがいかがか。

白鳥：問題ない。

北村：それからコスプレをとったと。

　次に13ページ。民間と同じようにチャレンジングな事業をバックアップするのが重要という意見。それから長沼さんの、特に大きなイベントに関してはどう見直すかということが大事というご意見。これには外部有識者による検証を行うということだがいかがか。

長沼：問題ない。

北村：最後に、北海道演劇財団の要望で、指標への演劇シーズンの追加。

ざっと全体を見て、色付け部分を中心に見たがいかがか。資料３だけでなく、資料２も見ていただいて。先ほど問題になったのは蛇口のことだが。

長沼：前にこの話をしていなかったかもしれないが、どうも私には「中間支援組織」のイメージがわからなかった。お話をうかがってわかってきたが、とても難しい問題を抱えていると思う。

何度も言うように公平性の問題。どういうアーティストにお金を出すかということがとても重要。ただ、何らかの方法で公平さを保つのはとても難しいことだと思うが、例えば順番に交代になどいろいろ方法があると思う。（北村委員長の提案の）施策２－２「文化芸術を支える土壌づくり」の重点取組事項。「令和４年度に実施した中間支援組織を通じたアーティスト支援の取組を通じ」というところに「公平な取組を通じ」とあえて入れてはいかがか。文章になじまないかもしれないが。

何とかして、そういう視点を持っているということを出すべきなのではないか。去年実施時は 2000 万円の予算ということだったが、今年にまた次年度予算を確保するのであれば、前の支援組織にまたいくのか、それはないですよと。今度は別のジャンルに行きますよと。もちろん議論が必要だと思うが。

ただ、公平であれば文化芸術が育つかという議論はあるだろうが、ある程度集中して投資する部分はなければいけないという考えもあるかもしれないが。何かそういう視点がないとならないと思う。

ステージ４にある中間支援組織の記述も同じ。公平はあたりまえのことなので、言葉として入る違和感はあるが、ニュアンスが上手く盛り込めないだろうか。

北村：ステージ２とステージ４の重点取組事項についてだが、伴走型の中間支援ということ。これはアーツカウンシル的な調査研究にもつながる。丸山委員は SCARTS で行われている助成金をよくご存じだと思うが、公平性担保のためにどういう取り組みがあるか。

丸山：私が携わったのが２年ほど前なので今どうなっているかわからないが。公平性担保の要件として具体的に上がっているところでは、審査という点では応募する団体とつながりのない、具体的にはあえて道外の方を審査員に呼んで公平に審査をする方策として打ち出していた。

あとは、応募そのものが広く団体さんに知れ渡るようにホームページなど開かれた場所で募集をかけるというのが、すぐ思いついた公平性に関わるところ。学術的な方も含めて色々なジャンルから審査員をお呼びするということが、打ち出していた取組と記憶している。

北村：研究・調査を進めるということなので、公平性・透明性は一丁目一番地だと思う。そこで審査に利害関係者が入っていたりということは当然避けなければいけない。

札幌文化芸術未来会議の方が大変熱心に委員会を開催して仕組みを決めていったのだろうと思う。私も議事録を全部拝見した。ただ、募集要項等の検討も行われたと思うが、日程がタイトだった。

初めての仕組みなので、各団体に情報が十分いきわたったかどうか、仕組みについて理解が及んでいたかどうか、反省点を検証しなければいけないとも思う。札幌文化芸術未来会議のメンバーの中でも 7 割ほどは期待しているが、3 割ほどは不信感という委員もいる。札幌文化芸術未来会議の中に入っていたメンバーからすれば、仕組みが分かっているので、急に入ってきた人には難しいのではないかという意見もあった。

前回は緊急避難的なコロナ対策として短い期間で伴走型の支援を行ったが、その理念というか、伴走型の支援をするという考え方がとても大事だと思う。それをどうやるかということについて、1 度経験してみたので、優れていた点・至らなかった点を検証しながら、公平性を確保する仕組みを作っていかなければいけないのは当然。

長沼：やはり当たり前の「公平な」と言う言葉をあえて入れるというのはなじまないか。ただ、そういった強いご意見があったということを記録していただければ。

柏原：前回、ご説明が不足していたかもしれない。令和 4 年度事業の検証については、第 3 回委員会で資料をお配りさせていただいたが、実施の様子を見ていた人間として申し上げたい。

ここで言う「公平性」とは、2 段階ある。1 段階目は行政から中間支援組織に対する支援であり、2 段階目は中間支援組織から応募してきたアーティストへの支援。

1 段階目について申し上げると、審査員の中に行政の人間が入っていた。また、先ほど丸山委員のおっしゃったように利害関係者がいる場合は、その委員は審査の採点に参加せず、残りの委員が審査をするというような公平性を期すという形になっていた。

問題は 2 段階目の方なのだと思う。中間支援組織からの部分がどうかというのは、第 3 回委員会の資料にもあるように、スキームの課題 4 番目の中で、「公平性・公正性の確保」ということを文化芸術創造支援事業の委員の中でも共有した。また、議会でも期待されているがゆえにこの点について答弁している。議会からも、良い事業だが公平性がないと信頼を得る制度にならないので、そこはしっかり今後予算化するときにはやってほしいということが、要望としてもしっかり上がっている。基本的に他の事業も公平性が必要なので特筆するのは違和感があるが、中間支援組織を用いた支援については市民の方に疑念を持たれないよう、制度設計をしていきたい。

長沼：よくわかった。1 段階目と 2 段階目で、2 段階目は特に公平性を保つことが重要。1 段階目について、中間支援組織を選ぶときに、ジャンルの偏りがないのかとか。同じ団体が指定を毎年受けるのことがないのかとか、できるだけ広いジャンルの人たちに支援がいきわたるべき。

ただ、そうすると限られた予算で 1 回限りでは何もできないことはあるかもしれない。3 年続けてほしいというのもあるかもしれない。しかし 3 年支援を受けたところが 4 年目に支援なしでやっていけるのかということもある。支援するということはある意味甘やかすということなので、例えば来年は、今年支援を受けたところはもう入らないのだということ。それからホームページに載せたというだけでなく、広くいきわたる募集をするということとか。それも含めて公平性を保たなければいけないのではないか。

柴垣：募集の周知というのは限られた時間ということもあり当然完璧ではないが、可能な限り伝わるようにアーティストや関係団体には積極的に情報提供させていただいた。あとは先ほど北村委員長がおっしゃったように、コロナ禍ということでスピーディーであった反面、難しい部分もあったので、改善しながら公平性・透明性も研究したい。

白鳥：公平性というところにつながるが、現在この委員会を傍聴されている方が古くからの知り合いで、1 点聞かれたことがある。それは、評価をどうするのかということ。

　まさしく、今回、計画素案 8 ページ 5 の「計画全体を支える仕組み」の中に事業の評価検証が明記されている。特にこのページの赤字で書いている「外部有識者による検証を適宜行う」とあるので、ここの部分をしっかり立ち上げていただければと思う。

根子：今回は緊急避難ということだが、こういう事業の柱は中間支援組織がどれだけコーディネートやコンサルティングをできるか。当然また募集をかけで団体を選ぶだろうが、伴走するだけの力、もっと言えば先を走れるくらいの力がないと事業としての成果が上がらない。まだまだ試行錯誤の段階だと思うが、そういう視点もないと、単に選ばれる人だけでなく、動かす人も育てて支援していく必要がある。

北村：前回お話のあったディレクターを育てるということ。長沼さんの意見の公平性をいれるかということは、全体としてなじむかどうかだが。これだけ議論をして、公平性の視点が大事だということが十分理解されていると思うので、あえて入れなくてもよいのかなと思う。

長沼：承知した。

北村：中間支援の在り方は第 4 期計画で初めて出てくる視点なので、アーツカウンシルの検討も含めて、どのような形で制度化されていくのかということ。成田さんが中間評価をしてはどうかという話があったが。私たちは行政の政策のロードマップを作っているわけではないので中間評価というのは難しいと思うが、この場で想像した物がどう肉付けされて実現していくかは、私たち委員で議論してきたので、将来にわたって札幌市がどのような文化行政を行っていくのか、私たちの議論がどう生きていくかということを見守っていかなければならない。ただ机上の議論をしたというのでは意味がないので、どのように肉付けされるのかということだと思う。今日が最後なので、他に何かあれば。

丸山：あくまで感じたこととして。今回、ステージ 1 ~4 の重点取組事項の中で、中間支援組織を通じた伴走型支援の仕組みが 2 回出てくる。その趣旨は、今までの委員会の中でも重々理解できる。アーティストのステップアップ支援にも中間支援組織やアーツカウンシルが必要だし、担い手の支援という意味でも必要。それで 2 回出てくるのはわかる。

　実際、最初はステージが 3 つだったところを、北村委員長が 4 つに広げてくださった。それは、文化芸術をより外に広げていくイメージを持つためにあえて 4 つしたということだと思う。

　あえて 4 つにして、中間支援組織を通じた伴走型支援の仕組みが 2 回出てくる意味を、どうすればもっと見た人に分かりやすく伝わるか、資料を頂いてからずっと考えていた。

例えば、アーティストのステップアップ支援や異分野連携というのも大事だし、ステージ２で言われているアートマネジメント機能、いわゆる担い手へのサポートの強化も、どちらも中間支援組織の存在が不可欠であるというのをより表せる表現の１つの案としてお聞きいただきたい。

例えばステージ４の施策２では、「令和４年度に実施した中間支援組織を通じたアーティストのステップアップ支援や異分野連携によるアーティストの活躍の場の拡大などの実現を目指す」というところを、「アーティストのステップアップ支援や異分野連携によるアーティストの活躍の場の拡大などの実現のために中間支援組織の取組みを推進していく」、中間支援組織の取組の推進を重点的に行うとすると、それぞれ違った、個々の目指すところのために、中間支援組織の取組みを推進していくということが、より言葉の問題ではあるが伝わっていくと思う。

前回、佐藤委員がおっしゃった、広げることで１つ１つが薄まるというではなくて、ステージ２の施策２の重点取組事項と、ステージ４の重点取組事項が、一見すると同じようなことが書かれていてポイントがぼやけてくるというように流すより、それぞれの目指すところに向けて中間支援組織の取組を進めるということが見えてくると、今回ここまで論じ合ってきたことがよりよく表れると思った。感じたこととしてお伝えしたい。

北村：ステージ２とステージ４で同じ中間支援組織がテーマになっているが、見え方が「担い手」の視点と、「アーティストのステップアップ」という視点。単純に再掲ではなくて、中間支援組織の役割を、ステージ２と４でそれぞれ変えてはどうかというもの。事務局はいかがか。

柴垣：しっかり検討する必要はあるが、とても良いと思う。

白鳥：この場で、中間支援組織の書き方をそのように分けるべきか議論をすべきだが、時間がない。書き方として何が正しいか判断しづらいのではないか。

また、中間支援組織の在り方も様々あると思う。１つは市からお金を中間支援組織に入れて、表現として適切かわからないが、そこからアーティストに配る。もう１つは、中間支援組織が事業を行って、そこにアーティストを取り込みながらやることも支援になるかもしれない。

今回はそれを行っているところが１団体あったが、あとは配る形をとっていた。配っているところは、公平性の観点からは、中間支援組織の関連組織などには配ってはいけないと思う。

ただ、評価委員会などがあってそこが認めるなら適切であるとか、色々方法はあると思う。中間支援組織という言葉の中には色々な要素が含まれると思うので。丸山さんがおっしゃることは非常によく分かるが、そういう意味では書くことができるか、まとめることができるかどうか不安。皆さんはいかがか。

北村：中間支援組織の機能について十分な議論ができていないので、それが担い手か、アーティスト側かということも十分に議論ができていないということ。

柴垣：もともと札幌文化芸術未来会議での議論だが、コロナ禍ということもそうであるし、それでなくても伴走型のきめ細やかな支援が必要ということ。そのためにはより現場に近い組織が行った方が良いということから始まった。

もう１つの観点として、そういった団体を育てるという視点もあって、この事業を行っている。なので、担い手として育っていくという部分と、アーティストのステップアップを支援するというのは狙っている部分。中間支援の事業のなりたちとして、両方をにらんではいる。

北村：丸山委員としては、書き分けられるかということはどうか。

丸山：中間支援組織という概念を、はっきりさせていけるとより深い議論が進んでいくと思うので、すぐに答えは浮かばないが、ここからの政策を進めていく上での課題なのだということ。

北村：ステージ２と４でそれぞれ目指しているところが、ステージ２が担い手の問題、４がアーティストの問題。中間支援組織という名前が良いのかどうかも含めて、これから調査研究、仕組みを考えていくということが、ステージ２と４の説明でもう少しわかるとよい。

４つの手法と併せて、それがステージと上手く繋げられるようになるとはっきりわかるようになる。我々はずっと議論をしてきたので当たり前だと思ってしまうが、初めて読む方がステージ１～４の分け方が何をポイントにしているのかがわかると、図ももう少し生きると思う。

ここは中間支援組織そのものの議論をする場ではないので、２つの側面をもっているということで、２回掲載されているということ。その意図を明確にするということ。

白鳥：書き方次第で私が不安に思っていることと、丸山委員が思っていることが両立する書き方があるかもしれないので、事務局にお願いしたい。

北村：事務局にお願いしたい。他に全体を通じて何かあれば。

長沼：この会議の委員になったとき、ぜひこれだけ言いたいと思ったこと。何度も話したが、大きな３つのイベント。PMF・シティジャズ・芸術祭について、しっかり検証を行うこと。それは計画には載ったので良かったと思っている。

私の感覚では、前に話したようにクラシックの人たちを欧州や米国に派遣する。札幌市は最近ではそういうことを全くやっていない。毎年外国の音楽をやる学生を何十人も呼んできて、素晴らしい先生に教えてもらっている。自分の家の子どもにご飯を食べさせられないのに、そんな余裕があるのかというように外からは見える。それはおかしい。

バブルの時に始めたことはなかなかやめられない。しかし、そういう見方があるということは、ここでしか言えないので言っておきたい。サッポロ・シティ・ジャズも、ジャズをやっている人たちが生活できるような働きかけをお願いしたい。ジャズか何かわからないアーティストを呼んできて、瞬間的な線香花火を上げても仕方ないと私は思う。やはりしかるべきアーティストに札幌に１年いてもらって、交流をしてもらえば、ジャズのレベルは上がる。または、そういう人を指名してそれなりの報酬を払うというようにすれば東京に出ていかなくてもよいかもしれない。

国際芸術祭については色々な意見があり、抽象的なアートなのでわかりづらいのだが。これももう少し市民に分かりやすいように。かなり反発もある。たまたまある人と札幌資料館の前にある石が何なのかという話をしていて、これがアートなのかと。整合性がないように思う。余計なことかもしれないが、これだけは言っておきたかった。

北村：そういった点を、事業の評価検証の部分で、外部有識者によって検証するということ。皆様からも最後にお話をいただければ。

谷本：大変勉強になった。昭和 38 年の市民憲章で「世界と結ぶ高い文化のまちにしましょう」とされている。北海道や札幌の歴史を調べている人間からすると、世界と結ぶ高い文化にするというのは、先ほど長沼副委員がおっしゃったように外から呼んでくるというのも重要だし、手を携えるということも大事だが、自分たちが住んでいる足元を深く掘ってみるとそこにオリジナリティがあって、それがあるからこそ世界と結ぶことができる。

なので、札幌市の文化芸術、ステージ 2 の文化資源の保存・活用ということだが、なるべく地に足を付けて、札幌ならではの歴史をしっかり担保することで世界と結ぶことができると、あらためて今回皆さんと議論を交わして感じた次第。ぜひよい文化芸術のまちになればと思う。

白鳥：現実的な話になるが。委員会が 5 回で終わるのはもったいない、もっと長くやってもよいのではとも思うところ。ざっくばらんな意見交換ができたことは、まちづくりをしている人間としても勉強になった。

今回、我々が議論したものが計画にどう反映されたか、また計画の進捗度についても聞かせていただければと思う。

佐藤：以前にも申し上げたが、文化芸術の育成は時間がかかるし、目先の効果だけを測ることは難しく、時間がかかってようやく花が咲くというものだと思う。それは私も美術館で長く働いて常々痛感しているところ。

長沼副委員長がおっしゃったジャズにしても、色々なアーティストを呼ぶだけではなく、私が勤務する札幌市芸術文化財団ではジュニアジャズスクールというのをずっと行っており、小学生くらいの子どもがジャズスクールに参加している。色々なアーティストを呼んで指導してもらう機会を作っている。

そういうことを続けてきたことによって、今、国際的に活躍するジャズアーティストが札幌から誕生してきていて、札幌がジャズのまちとして認知されてきている。これは大きな札幌の 1 つの武器だと思う。

なぜジャズなのかといった議論はあると思うが、育成などに成果が出るには長い時間がかかる。ただ、予算もあるし市の施策としてやっていかなければいけないので、こういった計画はある程度年限を設けてやっていくのだとはと思うが。こういう計画を通して、札幌というまちをどう良くしていくのかという視点を大切にしながら、こういう計画を短期的な成果を測るのではなく、継続的に評価していけるような仕組み・視点も評価の中に盛り込んでいただきたいと強く感じた。

卜部：こういった場が初めてなので、緊張したまま 5 回終わってしまった。毎回勉強させていただいた。私自身が障がいのある子どもたちと毎日絵を描く仕事をしているので、「障がい者アート」という言葉の考え方を常に迷う、疑問に思うという日々だった。

色々な自治体で障がい者アートを全面に打ちだしているが、障がいのある人達を支援するというようになると、作品よりも障がいのある人たちの支援にフォーカスしていって、逆差別とは言わないが、そうなってしまっているのではないかという葛藤が常にあった。しかし、注目してほしいし活動の場も頂きたいという葛藤もある活動。

今回の会議を通じて、札幌市の考え方として、その作品ありきというか、どんな方であってもまず作品が大事ということ、その可能性を多様に広げていくという視点。ステージ 4 がまさにそうだと思うが、本来関係ないと思っていたところもそういう視点で見ていくということで、気持ちがすとんと落ちた。これから子どもたちもそうだし、卒業生も作家として活動しているので、これからも現場で支援をするときに身が引き締まる思いでやっていきたい。貴重な機会をいただいた。

成田：私はイベントを主催することもあるが、基本的に文化芸術に関しては鑑賞者の立ち位置。この検討委員会は、今後 5 年間、私がどれだけ楽しく文化芸術に触れられるようになるか、ということを基礎にして考えていた。

NPO に関わっているので、この計画は 5 年後の文化芸術に関わる方々に対するラブレターであってほしいと思っている。

根子：こういった会議には出る機会は何回かあったが、これほど頭を使ったことはなかった。突き詰めると色々なことを考えなければならないと実感した。ただ、それを市民レベルで見た時にどうかというと難しい。

私が所属する団体は（（公財）札幌国際プラザ）は、市民憲章でいうところの「世界と結ぶ」、さらに世界を結ぶということを設立時のキャッチコピーにしていた。国際交流などをやろうとして 30 年たつが、世論調査や市民アンケートをとっても、国際交流は常に最下位に近い。文化はどうかということを意識したことがなかったが、いずれにせよ除雪が第一。国際交流や文化をいかに巻き込みながらシェアするかは難しい。

私にとっては勉強の場だったので今後に生かしたい。

丸山：5 回に渡って参加させていただき、例えば歴史学の観点から語ると、国際交流の観点からも課題という反応があったり、分野横断的に文化芸術を掘り下げるというのは本当に素敵だと思いながら参加させていただいた。

皆さんの様々な思いを、どうやって計画に盛り込んでいくのがよいか、どのように盛り込まれて行ってほしいかという観点から主に発言をしてきたつもり。これまで自分個人の人生も文化芸術に彩られてきたが、自分が生まれ育って思い入れのある札幌というまちの文化芸術にこうして関わらせていただいたことを嬉しく思うし、これからも関わり続けていきたいとあらためて思った。

長沼：ところどころこだわって、副委員長として委員長の進行を助けなければいけないところ邪魔をしてしまったかもしれないが。大変お世話になった。

北村：もしかしたら意見を誤解したかもしれないとか、もう少し整理ができればよかったとか思って、会議が終わってから数日寝つきがよろしくないなんてこともあったが。私の中でもまだ消化しきれていない部分が残っているので、何とか消化しながら、この先の札幌市の文化芸術を見守っていきたい。

谷本委員には特に文化財のところで的確なご指摘を頂いた。

白鳥委員は常にこの会議を前に進めるモーターのようで、大きな推進力になっていただいた。

佐藤委員は長い間担い手の立場をされている。以前調べたのだが、日本で職業としてアーティストの収入を得ている方と、学芸員などの方は統計的にほぼ１：１。担い手も育てなければいけない。当然、アーティストもそれによって育つ。そういったことをしていかなければいけないと、佐藤委員の話を伺っていてあらためて思った。

卜部委員は今回の会議でもよく勉強していらした。特にアール・ブリュットの件では私も誤解をしていた部分があって、障がいの有無だけでなく、外国籍の方やジェンダーなど、そういった方も含めてソーシャルインクルージョンのような形でお互いに支えあう。それが文化芸術によって行われる。そういう在り方が見えてきたのが良かったと思う。

成田委員はつい見過ごしてしまいがちな原理原則に立ち戻らせてもらった。当たり前に思っていることが当たり前ではないということを常に気づかせてくれた。議論をフレッシュにするご意見をたくさんいただいた。

根子委員は国際交流・観光・SDGs など、ご自身の関わりの深いところでご意見をいただいた。特に SDGs の観点が今回入ったのが重要だと思う。

丸山委員は、公民権時代のアメリカで音楽が果たした役割のお話が非常に印象に残っている。音楽に限らず、文化芸術が非常に大きな力を持ちうる。時には悪いことにもなるかもしれない。そういったことをあらためて気づかされた。

中間支援の事も、どちらを向くかと言うことを明確にしていただいた。常に表と裏があり、良いとこどりをするのではなく考えていかなければいけないと感じた。

長沼副委員長には大所高所からずばりとご意見をいただいた。評価をするというのは大変難しい。佐藤委員からも短期的に評価は難しいというお話があって、どう評価するか、ただ人数が増えればよいということではないので、どう評価すればよいかということは大きな宿題だと思っている。

皆さんのご意見を受け止めながら進めるためあまり前に出ないようにしたつもりだが、少し出てしまったかもしれないが。あらためてお礼を申し上げたい。

では、事務局にお返ししたい。

髙橋：7 月から短い期間で何度もお集まりいただき、濃い議論を数多くしていただいた。本日のご意見を含め、基本計画の本書を作成し、庁内調整の後、年明け頃に教育委員会や市議会に報告をし、3 月にはパブリックコメントを実施することで世に出していきたい。委員の皆様には適宜情報をご報告する。

最後に告知になるが、中身ではなく表紙のお話。今回、ソーシャルインクルージョンという議論もあり、一方でアール・ブリュットという言葉自体はあまり記載していないが、考え方は随所にちりばめられていると思う。

そういったこともあり、この度アール・ブリュットの分野で実践をされている卜部委員のご協力で、然るべきお子様や卒業生の方の作品で表紙を飾りたいと考えている。ご承知おきいただきたい。

それでは、閉会に当たり文化部長からご挨拶を申し上げたい。

柏原：4ヶ月ほどという短い期間の中、非常に濃密なご議論をいただき、あらためてお礼を申し上げたい。おかげさまで多くの示唆に富む計画案になったのではないかと思う。

今回いただいたご意見の中では、特に他分野との連携や担い手の支援などといったことに触れていただいており、これまで以上に進めることになると思う。ステージ4「文化芸術の領域の拡大」という新たなステージを構成していただいたし、ステージ2ではアーティストを支える方々への支援、ステージ4では異分野との連携や担い手となるアーティストへの支援というように、第4期計画で実現したいことがわかりやすく伝わるものになっていると感じているところ。

そのほか、アール・ブリュットの考え方を踏まえた「誰でも芸術に親しめる環境の整備」、「学校と連携した子どもたちへの機会提供」、「アイヌ施策や文化財施策の領域の拡大」、「SDGs未来都市を踏まえた環境配慮」、「基金の活用」や「事業の見直しの考え方」など、今後の文化行政の更なる発展のために、これまで以上にしっかりと盛り込めた内容と考えている。

課長からご説明を申し上げたように、今後、皆様からいただいた意見を踏まえ、市内部の調整を行い、年度末にパブリックコメントなどを行っていくことを予定している。この基本計画をもとにしっかりと文化芸術施策に取り組み、文化芸術の力を活かしたまちづくりを進めていきたいと考えているところ。

最後となるが、あらためて感謝を申し上げまるとともに、併せて皆様方の今後ますますのご健勝、ご活躍、そして引き続きご指導、ご鞭撻をいただくよう心からお祈り申し上げ、ご挨拶とさせていただく。

（以上）